

誰もが認められる社会に

私は障がいがない。また、私の親族にも誰ひとりいない。私は、みんな何不自由ない健全の人たちばかりの世界だと思っていました。そんなある日、私の校区内に、堺市立健康福祉プラザが建てられた。その頃、私はまだ幼稚園の年長さんだった。建てられたときに思ったこと、それは「福祉って何？健康ってみんな健康な人だよ？なのに、どうしてそんなものを建てるの？なにかいいことでもあるの？」でした。当時の私は、障がい者の方々の存在を知りませんでした。

建設されてすぐ、私は母と一緒にその建物へ行きました。福祉プラザの入り口には、障がいのある子どもさんが描いた作品がありました。その絵は自分の個性をすべて詰め込んだ作品のようでした。そして私はこの日、初めて障がい者の方々の存在を知りました。

小学校に入ると、私の同級生の子に障がいのある子が二人ほどいました。私を含む同級生の子たちと、毎日その子たちをクラスみんなで支え合い、共に過ごしました。障がいのあるその二人は、少し怒りん坊で、人間関係が上手にできない子たちでした。私たちは、その子たちの気持ちをしっかり理解してあげることと、自分の感情をうまく伝えられないときにどう手助けしてあげられるかを考え、たくさん関わりました。

また、学校全体での取り組みとして、特別支援学校さんへ交流するために訪れる機会も多々ありました。特別支援学校の生徒さん達は、私の同級生とは違い、自分で歩くことができなかつたり、言葉を喋れなかつたり、自分だけでは本当に何もできない方が多くいました。そんな中でも、私たちを笑顔で元気に迎えてくださった支援学校さんの思いに、胸がとてもいっぱいになりました。迎え入れてくださったあと、私たちは支援学校の校内を見て回りました。すると、私たちの学校にはない様々な道具があり、とてもびっくりしました。また、最後のお別れの際、特別支援学校さんが作られた支援学校の日常を撮影した動画を見せてくださいました。生徒の方々がみんな楽しそうで、自分をのびのびと表せている様子を見て、障がいがある、ないにしても、私たちと同じ一人の人間だと改めて感じることができました。さらにこの時、私は初めて障がいのある方々にも、障がいの重さがあることを知りました。その日以降、私は友達と一緒に、障がいのある方を目にすると、積極的にお手伝いするようになりました。

私が小学校中学年の頃、友達と福祉プラザの一階のロビーや屋上によく遊びに行っていました。そこで、障がいのある方が一生懸命ダンスのレッスンをうけているところや水泳をしているところ、また、バスケットボール専用の車いすに乗り、障がいのない方々と一緒にバスケットボールを楽しんでいる光景を目にしました。私はこの時、障がいのある方でもちょっとした道具の手助けがあれば、スポーツであつたり何にしても、少しだけ不自由なく過ごせるのだと実感しました。そして一番嬉しい光景がみんなが笑顔で「きゃー、わー、うえーい」などと叫んでいて、今の気持ちがすごく表れていたことです。みんなが笑うと本当に楽しそうで、私も交ざりたいと思いました。

今では障がい者の方々と、コロナのせいもあり、小学生の頃のように直接関わるような機会が少なくなりました。私自身、障がいのある方の気持ちをもっともっと知り、たくさん関わりたいです。

私は中学生の頃から電車通学をしていて、障がい者の方を見たら、席を譲ってあげたり、端のところに私が立っていたら、そこを空けて譲っています。他にも、階段の上り下りを手伝ってあげるなど、少しでも楽になるようにと行動をしています。たまに、電車の中で「うわー」と叫んでいたり、ただ一人で怒鳴っている方がいて、その方の近くにいる方々がその障がいのある方から遠ざかっている光景を見かけます。そんな時、私はとても悲しくなります。まるで、その人がいたら嫌だ、だから目に見えない何かで、障がい者の方々に居場所がないことを言っているかのように思えました。

今の時代、多様性が認められ、性に関しての意識も徐々に増えてきているのにも関わらず、障がい者の方々に関しての話題があまり上がっていません。なぜでしょう？性の問題の方が大事だから？問題に大事か否かなんてありません。一人でもこの問題を変えたいと思うのであれば、それはみんなで考えていく必要がある問題です。そのためにも、私は障がい者の方々に少しでも役に立つために行動していきたい。コロナ禍が少しずつ収まり、徐々に課外活動も許されてきている。

私は大学生になったら、障がいのある方々への支援をしていきたい。そのためにも、今はたくさん勉強をして、力をつけていきたいと思う。本当の誰もが認められる社会に。みんなが少しでも安心できて、助け合える社会。全ての人に平等な居場所ができるよう。